

三井寺新羅社歌合  
新宮撰歌合  
八幡若宮撰歌合

四十番  
三十二番  
十五番





証號丙五の二十七

三井寺新羅社歌合	四十番
新宮撰歌合	三六番
八幡若宮撰歌合	十五番



皇都書肆富永春行藏版

續智慈海

以來子孫永茂共舞



三井寺新羅社歌合

美安三年八月廿九夜

題

遙見山花

古御郭公

湖上月

野宿雪

談合友志

作者

十六人

左

中納言君

法性寺石藏  
法橋房

阿闍梨蓮忠

三乃  
聖羅院住

阿闍梨證并

丹後  
為成息

北後君明智

藏人君賢辰

常陸公道禪

師君信親

依君良敏





右

少輔君

三井寺南院執行房住  
教智律師之房

阿闍梨泰覺

泰尋法橋息

阿闍梨親實

大臣伊實息

大進君智選

讚波君親宗

觀歿

出羽公長照

少侍君智經

俊忠息

淡路君忠勝

講師

伏公良敏

讀師

藏人公賢辰

判者

從三位行白太后宮大夫俊成卿

一番 遠見山花

丸 勝

中納言君

芳野山本乃こす侍よのる雲は花のけりれり免成り

右

少輔君

三若那の水月け山志たのひよりこす白波や花の中奴た  
たのあすこゝん傳り侍り但本は指にとるや  
雲と名別ちらむやうにこゝんやん右家三つりきひの  
とさきくこすあははふまうくさるんいおり  
さだす息に花ゆふをこゝるやほのてこく  
まこゆんだの本こり指かう花をんよあはさ



巻とPへ

二番

九

阿闍梨蓮忠

とどろくに雲がほろひぬ山嶺あまぬせうはめてとどろえめ

右 場

阿闍梨泰覺

白雲にひらきよもやん様うつくはたのまきめなるん

たよめちほおし〜んもまにゆにたうら〜んは

〜んをす〜ん不足あ〜んれりあ〜んぬら〜ん

ゆ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

た〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

ま〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

三番

右 場

阿闍梨隆兼 丹後

静〜ん花は山嶺が日やう〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

右

阿闍梨親實 大臣

す〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

たの〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

あ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん



せりしう家とて平一すむるをあらぬちり  
あふふ家合のくまうあるまはしりや仍す  
はさうて事しうをるを味くぬか

巴もあ

左 拵

明智 紀後云

雲のわらをれたけぬを梅花さくとけぬを別工けり

右 拵

智 暹 大通云

をりくや花やけりしういふとふさくぬの言の雲

たのふさくけりぬいふたけをさくやれとふはけ

己等雲や忽同しうくぬか

六もあ

左 拵

賢 辰 善人云

善人ふららぬわし梅花のけりしうを家のさく雲

右 拵

觀 宗 潜 岐云

たけひらぬのけりしうをさく雲にんすのふららぬ

たけ春凡と雲を梅花を懸てさく雲にんすの

事さけしうとすしうとけりしう花のやれ雲文

照花混とすしう雲にんすのふららぬ

すしうやれやあらぬ花の梅花の善人己ふ

らぬふを又拵さく







城下をめぐりてはしむるに  
しるすにちまたの條と一し

左

左 敬 作

花ふきかきとてやんはあちこちをのりて

右 條

志 條 作

花ふきかきとてやんはあちこちをのりて  
左 條 作  
花ふきかきとてやんはあちこちをのりて  
右 條 作  
花ふきかきとてやんはあちこちをのりて

一 番 右 條 作  
花ふきかきとてやんはあちこちをのりて

右 條

中 納 言 君

花ふきかきとてやんはあちこちをのりて  
右 條 作

花ふきかきとてやんはあちこちをのりて  
右 條 作  
花ふきかきとてやんはあちこちをのりて  
右 條 作  
花ふきかきとてやんはあちこちをのりて  
右 條 作











あまのこゝろをちかむるはらけのまはらけの  
うらやまのこゝろ

六番

九拾

道祥

あまのこゝろをちかむるはらけのまはらけの

右

長照

すむかひのこゝろをちかむるはらけのまはらけの

二首のまはらけのこゝろをちかむるはらけの

あまのこゝろをちかむるはらけのまはらけの

あまのこゝろをちかむるはらけのまはらけの

七番

九拾

伝親

あまのこゝろをちかむるはらけのまはらけの

右

智深

あまのこゝろをちかむるはらけのまはらけの

あまのこゝろをちかむるはらけのまはらけの

あまのこゝろをちかむるはらけのまはらけの

あまのこゝろをちかむるはらけのまはらけの

あまのこゝろをちかむるはらけのまはらけの

八番



た 係

良致

あはれなる人々の心は、世に流るる水のごとく、清く濁らざるを

右

忠信

あはれなる人々の心は、世に流るる水のごとく、清く濁らざるを

あはれなる人々の心は、世に流るる水のごとく、清く濁らざるを

あはれなる人々の心は、世に流るる水のごとく、清く濁らざるを

あはれなる人々の心は、世に流るる水のごとく、清く濁らざるを

あはれなる人々の心は、世に流るる水のごとく、清く濁らざるを

あはれなる人々の心は、世に流るる水のごとく、清く濁らざるを

あはれなる人々の心は、世に流るる水のごとく、清く濁らざるを

あはれなる人々の心は、世に流るる水のごとく、清く濁らざるを

一番 湖上月

た 係

中綱云君

あはれなる人々の心は、世に流るる水のごとく、清く濁らざるを

右

か浦 君

あはれなる人々の心は、世に流るる水のごとく、清く濁らざるを

あはれなる人々の心は、世に流るる水のごとく、清く濁らざるを

あはれなる人々の心は、世に流るる水のごとく、清く濁らざるを

あはれなる人々の心は、世に流るる水のごとく、清く濁らざるを



時の奇にいづとけえ侍したる侍も下

二

九 拵

蓮花

月まゝ人志多乃り人具にそとみたるにわづれ

右

奉覽

すゑの海女をよめと時をわらわす氷

たの志多浦の海女の志多乃り右に海女の

海女の志多乃り右に海女の志多乃り

海女の志多乃り右に海女の志多乃り

三

九 拵

花巻

片浪やまの浦にけきとてやむの志多乃り

右

観音

月夜あふこの志多乃り右に海女の志多乃り

たまをよめと海女の志多乃り右に海女の志多乃り

や月まゝと海女の志多乃り右に海女の志多乃り

とそとつらと右に海女の志多乃り右に海女の志多乃り

後連らつと右に海女の志多乃り右に海女の志多乃り

す(海女)

一







ふらふらとさるる右いさうの海さうせん

六番

九 拵

道保

ゆきやえの波のあやのうぶうつてくはる 舟のうぶ

右

長忠

月まはるけり のり せとせと のり 沙るる のり 浦 不詳

たえと のり 波の のり せと のり せと のり せと のり

あふ のり せと のり せと のり せと のり せと のり

と のり せと のり せと のり せと のり せと のり

く のり せと のり せと のり せと のり せと のり

七番

九 拵

伝親

大 のり せと のり せと のり せと のり せと のり

右

智光

け のり せと のり せと のり せと のり せと のり

波 のり せと のり せと のり せと のり せと のり

と のり せと のり せと のり せと のり せと のり

と のり せと のり せと のり せと のり せと のり

と のり せと のり せと のり せと のり せと のり

と のり せと のり せと のり せと のり せと のり



とつて彼方のてふにすれはるゝとつていふすゝ  
とつていふはるゝ傳へん

八番

九折

良教

とつていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ

右

忠信

つていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ  
つていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ  
つていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ  
つていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ  
つていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ

とつていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ  
とつていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ

一番

野宿雷

九折

甲綱言書

つていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ  
つていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ

右

少備公

つていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ  
つていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ  
つていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ  
つていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ  
つていふはるゝとつていふはるゝとつていふはるゝ



とていふにやむしとあはれよふそとよあふりしは

二番

たお

連た

去業の唐ちやまふ我のこを言まじしは

た

春是

あふ月夜は梅葉ありたふりしてあふ守に林ふ雪を

たあふ去業の唐まれあふりたあふ

三番

たお

院是

雪あふりし時のはの露のそあふりしは

た

親是

あふ雪を思ひたはる雪の夜も教つしは

たあふりし時を思ひたはる雪の夜も教つしは

こふたの雪も教つしは

まはりしは

はまのあふりしは

日教を思ひつしは

を思ひしは

た

あふ



左

明智

いかにしむ可時乃百雲行しつゝ茶のまゝにとて候はば

右

智選

道えたる雪うらやみゆき分て妙人をまゝに仕りの形を

あそこの何所候為同神たの茶花のむすう

はしりしやあし右に候候者之徒類類

茶蓮之行人さもあゝさゝさゝ右候ふ

はしり

土番

たか

辰辰

つてけし野系のをあつて候ふつゝも茶花に候

右

観宗

いかにしむ可時乃百雲行しつゝ茶のまゝにとて候はば

あそこの何所候為同神たの茶花のむすう

はしりしやあし右に候候者之徒類類

茶蓮之行人さもあゝさゝさゝ右候ふ

いかにしむ可時乃百雲行しつゝ茶のまゝにとて候はば

あそこの何所候為同神たの茶花のむすう

はしり

土番



九

道程

いさよの嶽の山をたどり雪のけしき野原の

右 峰

長忍

あまの山々のまはりにわたりて雪のけしき

右 峰のまはりにわたりて雪のけしき

むすむすのけしき雪のけしき

はやくとくくはやくとくくはやくとくく

あまの山はまはりにわたりて雪のけしき

いさよの嶽の山をたどり雪のけしき

七番

九 峰

伝親

あまの山々のまはりにわたりて雪のけしき

右

智野

あまの山々のまはりにわたりて雪のけしき

あまの山々のまはりにわたりて雪のけしき

あまの山々のまはりにわたりて雪のけしき

八番

九 峰

長忍

あまの山々のまはりにわたりて雪のけしき



右

右書

ぬえよの取たるの白書にせしはたむらひをせしむるの語と  
丹つひの書にせしむるの語とをりてはるるなり

一番

談合文意

左

中納言云

ちりしと非ちりしとにさうしとさうしとをりてはるるなり  
右書

右書

少輔

白書ぬえよの中とにひらきとにたかきとにさうしとにさうしとに  
たかきとにさうしとにさうしとにさうしとにさうしとに

右本さうしとにさうしとにさうしとにさうしとにさうしとに  
乃廣さうしとにさうしとにさうしとにさうしとにさうしとに  
右書あり

二番

たか

蓮志

又さうしとにさうしとにさうしとにさうしとにさうしとに  
右書

右

春光

右本さうしとにさうしとにさうしとにさうしとにさうしとに  
右書

三番



た

沈黙

あまのりくちあはれなる人の心はうらやましくあ

古傳

乳寧

あまのりくちあはれなる人の心はうらやましくあ  
たまたまのりくちあはれなる人の心はうらやましくあ  
たまたまのりくちあはれなる人の心はうらやましくあ  
のりくちあはれなる人の心はうらやましくあ  
焼く懐其程で然るに右の傳

あま

古傳

明智

あまのりくちあはれなる人の心はうらやましくあ

右

智選

あまのりくちあはれなる人の心はうらやましくあ  
たまたまのりくちあはれなる人の心はうらやましくあ  
たまたまのりくちあはれなる人の心はうらやましくあ  
あまのりくちあはれなる人の心はうらやましくあ

あま

古傳

貞辰

あまのりくちあはれなる人の心はうらやましくあ

古

龍宗

あまのりくちあはれなる人の心はうらやましくあ  
たまたまのりくちあはれなる人の心はうらやましくあ  
たまたまのりくちあはれなる人の心はうらやましくあ  
あまのりくちあはれなる人の心はうらやましくあ



れ申しとくまふるまふりておとす

六番

九お

道祥

あま乃由り可あらぬ命より君より我にやきたる

右

長思

及そまきやれはたのまらるるいあらそ君よりあまの志は

あ首の志緒原又まら明おるるいひのま

君よりしとまのいひのいひにまらるる時

あるなり他人の誅まらる時君字願は荒涼

たはふやこふり又おあり

七番

九

信記

思ひよたのし中そつりまらるるあまのまらるる

右 緒

智純

君よりそ祈りまらるるいあらそ君よりあまの志は

たはる中難誅詠以可通路不指とつる

おくまらるる右誼言友為君以志之謂妹

ころ又いひあらるる他右のいひの白の友則と

たとせらるる心程まらるるまらるる

結するへ



小島

大務

良致

あはれに我れはしるぬ君ふもやわたりてよき事

右

忠務

出づればいふはひのふかきいふまていさてあはれに

九寺の又可きうなえのうとてえん是乃てうは

名ふふとていれちていさるるおとちていさるる

あまのうとていさるるうとていさるるうとていさるる

いさるる

別者三可

あまのうとていさるるうとていさるるうとていさるる

先日不給頼之奇念如形加判詞不進流也

日本能有種之病疾且難有君命且依恐

神慮相扶接切也抑近來和語收道家處

多以悔死然る自陣事不驚思強之交接

今之及奇念者殊感與不少者也三密瑜伽

之壇信誓詠柿下之風二乘公觀之宗前

達望湖上之月昂急詣新羅社之廣前各

誦誦豐昔平原之舊法以更為分付務員

誤被石衣魚判一為忌一為杭者歎以拙才之



唐名及泉徒之、子圖已可為今世名譽  
後世資糧也但愚判之趣定不可衷心依  
欲非條柳畏申之由可然、故可令披西路  
及也頓首敬白

十月廿日

白皇后宮大吏俊成

謹上 石藏法橋涉房

李  
以世本一校子

二應永廿七年六月日

新宮撰奇合

建仁元年三月廿日作者隱名藤原兼

題

震隔遠樹  
松下晚涼  
嵐吹寒草  
寄神祇祝

羈中見花  
山家秋月  
雪似白雲

雨後郭公  
湖上曉方  
遇不逢也

尤方

在大石良地

因大石

權中納言公經

釋阿

越前

教位隆信

友之末中將通具

教位有家

友位保季



上總女家隆

寂蓮

敬位鴨長明

敬位安茂季保

右方

御製

前侍信意系 権大納言

権中納言兼宗

兼議公經 大宰式部光

宮内卿

讃波 丹波

左を兼権中將定家

左を兼権少將雅隆右を兼依具親

大馬助家長

講師 九方左を兼中將通具 右方兼議公經

講師 九方上總介家隆 右方左を兼權少將雅隆

判者 釋阿

一番

霞隔遠樹

九 掛

内大臣

是のほろ積みより兼宗のく 聖のふりりたるを三水

右

女三局

浦乃松のこやまははと春えか 兼宗をさるるを乃くま

たのぶを右方か 兼宗の権を兼宗とんて聖の煙と

予と兼宗の心を下たふひてや字ゆるた方陳り云

はよふみ秘伝のくんとあはれ此中のかよひ待を

の常にいひあつる事なり右方をた方とふり者あり

判者云左方右方とつるに兼宗はあはれ右方



此よりいふかおしりしはるかにあめたなりや  
世に持とてし

二番

左 お

右 大は

さう免しおきり彼が深むま久しくんせぬまうし  
お

右

左 後云種

たうまきや云田の流り柳系みうとつうくつはしき  
たうまきや云上に泳ぐしをたて下みせぬとつれ  
同なり病いしむ右まとなやまをせよ云田の流  
と心はこと思ふよう云田の流とをせむとをま

集いしるんやれ柳系六田のしまた流りの作や  
おのつかり 右 陳し云六田の流り柳古すは流り  
りし作ふやる流院奇ゆしへしと

判者し云たうは明しうししはれもあう免の初し  
ひあて右す六田流おつかり 又持とてし

三番

左

右 麻蓬

はあまをま松のみうらうらうはくをあにうらうらう  
右

右 孫

左 孫 松の流り

みおふおるぬ流り松の流りしんくしんくしんく



右 云末と... 松の葉 ...  
右 寄御たり云み...  
判者云みく...  
く...

四番

霧中見花

九 拵

寤蓮

様乃そいく... 花のや...

右 震瀧老樹

忘 糸

み... 朝中... 杖の雲...

右 云... 割瀨...

右 云... 又...

判者云... 又... 又... 又...

五番

霧中見花

九 拵

忘 糸

右 云... 又... 又... 又...

右 霞瀧老樹

雅 蓮

右 云... 又... 又... 又... 又... 又...



ふり強林の明みとをける一ちりや判支たをい

云妻 羈中見花

左 右

左 右

みやこり吹こし風乃をまて花つはつこ山海ぬり

右

文内卿

花口の申すも思ひぬあるは花ちるころ乃うけの山こえ

左身ちり云吹こしはのともま身ふたちる

まこめりわ右身たし云なるめ花といふあむま

あこし花あこしとよみあこしして色たうとんと

云物のぬすもいこいこ

判者云う川の山紙行留物被明ははるめえてきた  
りくあをいそりおま花よいまんあうそやゆん  
右方人高時橋あゆしとさるる一陳尸やまま  
先したんゆすまおとす

七番 西後郭云

左

通具

むらさきも雲がはけくは月をちるる小枝のこえ

右

猪鬃中見花

雅徑

岩松やこまけの山成かまて花もくろあらのあらし

左身右方云月をちるるといふちるるかう右



また歌なるさうさうありしを

判者たをともく信す

八重 万後歌云

左 持 因太臣

何ぞ歌いそむく心とくまをいふはめこそ水乃橋花

右 霽中見花 並 兼

もどわまのつれみみのつれ花乃雪の宿のまを

左 寄 ちよん月乃をわすれしつれ文とくぬい

つれぬの後乃んたはいつれちよん時乃をくま

後のんはひのりもこちよんありしを藤のふさふさや

判者たを信すあつたをともく信す

せえく橋のまをちよんちよんちよんちよん

ちよんちよんちよんちよんちよんちよん

たをちよんちよんちよんちよんちよん

藤乃花乃橋中れ家ふれふ叶やこも

信者こつちよんちよんちよんちよんちよん

へくちよんちよんちよんちよんちよん

ちよんちよんちよんちよんちよんちよん

ちよんちよんちよんちよんちよんちよん

九重 万後歌云



丸 抄

丸 大長

けしきとていふくすけり人かきまきく月はゆん

古 霧中見花

如房

はるの花は波もさかきふり多うて藤乃と木の松山

春もさかきふり

別者もさかきふり海もさかきふり丸の月と約ころ

古花の波もさかきふりくゆもさかきふり

十番 万後舞云

丸

名家

けしきとていふくすけり村のりちるいあらうそかきふり

古 借 同

讃 波

六月の雪も夏月乃をゆきとまりけりけりけり

古乃奇もさかきふりさかきふり及ゆきとゆき

別者同如若翁

十番 松下吹涼

丸 抄

数位隆信

立よの夕波すくしほる乃松を林もゆきぬ如伊

古 同

大宰之武元花

林も風もゆきぬ松の思ひもゆきぬ夕もゆきぬ

古 古 抄 又 如 光



半判者たの夕波すくまゝとらへしきりしりや  
いぢまへ

三番 山家秋月

九 孫

通具

けは瑞つゆをく身のうき造りやまらけの秋のう

右 松下晩涼 公孫

友をふけ山陰の夕をえ松うくをふひくしの秋

判者く云友はまふくし家はまふくしをいひま

あやた言優ふまこはふ可ぬ信

十三番 山家秋月

九 孫

尤大信

叶しあまを人まきく深山の月ふけ風う

右 松下晩涼 急信

梢よりゆふ露わたる松根はけりあまの名もあは

判者く云右言降や指難た枝より一とまての信

古書 湖上曉音

九

公繼

月よりや浪初起る音にまきく風うくしふまは明の月

右 孫 松下晩涼 丹波

海に波松の本信ふまきく海にうねれの中よりあ



たしと云右言尤区流以承伏

判者尸云た身流在指流右言宜以有為

十卷五 湖上曉音

右 抄 内大臣

ゆわらるる言のたしにみり流ここまをまはれをのしとま

右 松下暁涼 兼宗

夕中色林のりてを光とて寝ふ即ふま付りしは

判者尸云とらりしとてひいふとま(也)とま

けりかゝるは抄とん

十卷五 湖上曉音 通具

あつる具やうつて流音の痛つてん彼うし流る有和の月

右 備 山家秋月 兼宗

氣きいふ月よりあつる神のぬり聖い林の秋新ふ山の傍

右 尸云た言は共中秋月暁る痛き一花の心あ

たりとる

判者云右言心詞尤うう一具互以有勝

十七番 尾次をき宗

左 内大臣

秋をくあれとま流を流る心とるあしりの登りの名着

右 備 山家秋月 定家



詠人けりて松の木乃若くはけりての月をよみたる

判者云古居翁

十九夜 山吹を草

左

持河

小篠束敷申のあけりていそくへてはあけの霜はね結ひ

右 翁 山家秋月

女房

葉の戸やけりてさむきさみさきの月吹毛よけりて

左 判者云をけりてはけりてさむきさみさきの月吹毛よけりて  
あけりてはけりてさむきさみさきの月吹毛よけりて  
あけりてはけりてさむきさみさきの月吹毛よけりて  
あけりてはけりてさむきさみさきの月吹毛よけりて  
あけりてはけりてさむきさみさきの月吹毛よけりて

判者云古居翁のれおきりてを左居翁と定り

十九夜 山吹を草

左 翁

保季

山吹のけりてはけりてさむきさみさきの月吹毛よけりて

右 山家秋月

雅臣

山吹のけりてはけりてさむきさみさきの月吹毛よけりて

左 判者云古居翁のれおきりてを左居翁と定り

判者云古居翁のれおきりてを左居翁と定り

二十夜 山吹を草

左

秋翁



はく又然りしやあ〜く我のれらつ〜森のま〜

右 縁 湖上吹雪

うすきりけけけいし〜るの月〜う〜あ〜ま〜の〜

右 下 云 井 根 の 下 地 吹 雪 の 下 地 吹 雪 の 下 地 吹 雪

みつたや云りるむと又か〜し〜

判者云う〜書方〜し〜毎がや〜も〜款の〜

匡為縁

千一妻 尻吹雪草

丸 丸大臣

本の家敷くはまむ〜も〜か〜ら〜枯雪乃弟に丸

右 縁 湖上吹雪 女房

志りけ〜や〜ん〜る〜木〜の〜音〜を〜く〜け〜お〜の〜

右 未 下 光 判 者 右 三 村 心 小 心 丸 又 屋

ま〜い〜も〜尚 以 右 為 縁 下 一 中

千一妻 雷似白雲

丸 丸大臣

雷る〜い〜月〜と〜と〜や〜ま〜あ〜ん〜を〜ひ〜る〜を〜そ〜る〜界〜の〜

右 湖上吹雪 右馬 家長

るの海やう〜い〜ひ〜り〜雪〜の〜ま〜か〜こ〜し〜ろ〜も〜あ〜の〜

右 顔 日 下 下 毛 丸 品 割 衣 心 似 一 丸 友 を 之 丸 為



之は判者

千重 雪似白雲

左は

麻蓬

花の早ふは色も白雲のふりうとふか松の雪あは

右 花吹雪草 定家

あまのやゆるたは春の冬を秋を秋とあまき 花の早

判者よといひく後こまの松

千重 雪似白雲

左

梅阿

あまのやゆるたは春の冬を秋を秋とあまき 花の早

右 花吹雪草 花光

あまのやゆるたは春の冬を秋を秋とあまき 花の早

左 花吹雪草 判者よといひく後こまの松

千重 雪似白雲

左

あまのやゆるたは春の冬を秋を秋とあまき 花の早

右 花吹雪草 如房

あまのやゆるたは春の冬を秋を秋とあまき 花の早

左 花吹雪草 判者よといひく後こまの松

千重 花神祇祝



九 緒

内大臣

君よりみよをのちやうくして天恩日有りては

右 雪似白雲

権大納言忠良

冬のおしり吾等の山より白雲雪と見ゆるにけり

判事たる緒

千代女

遇ふ会ふ

九

新前

くちしよふあは後とやうしてをるる名をわすれり

右 雪似白雲

女房

雪やうらなぬち海の山はふはさきくその家にあは

九 雪不及は右歌の力緒に女判者より

千代女

遇ふ会ふ

九 緒

権前

泊深はみよをのちやうくして天恩日有りては



右 家祓祓祝 文内御

敬告之及夫よりひに祓祓やみよとて川のやうなまに  
判者以右指とすし女尸紙右もに右とす  
徳に申す也

辛酉 遇不會云

左 家登

いりここのちきりいんちきりこの指乃うふぬぬの月  
右 指 家祓祓祝 女房

祓祓やひすけたる本紙のひよりみすす川の末を  
右 祓祓ふよりくく指に女判文あり

辛酉 遇不會云

左 長明

かゝるこなたおひひんち人のりてまゝなあはせ  
右 家祓祓祝 意者

君もいんちのひよりくく先七の指乃うふぬぬの月  
以右指乃より判文右もに右とす

辛酉 遇不會云

左 家 二拜違

うらぬぬのひよりくく今ぬぬのひよりくくゆぬぬの月

右 同 丹後



口を以てその禁をせむらん其の事一に於ては

左方たるの事

判支由是より以後也諸員定りに及

辛酉

左方

田大辰

あひそむむしつらうつらうの事

右

定家

人より其の事舟の月より口を以て社乃事

判者云左方区より其の事

辛酉

左方

九大臣

其の事其の事其の事其の事

右

具親

其の事其の事其の事其の事

右方其の事其の事其の事

其の事其の事其の事

辛酉

左

檀中納言云

たし其の事其の事其の事

右

云



あはまのふりやいづゆりもよしのあまはたへんきくはる  
古きふりきくはるは古きふりきくはるの別者曰之

辛酉

九 結

道具

あまのふりやいづゆりもよしのあまはたへんきくはる

古

三内卿

恨もぬく社なほきくはるのせしほははるあまのふり  
左に云あまのふりきくはるのふりきくはる  
別者云いづゆりもよしのあまはたへんきくはる

八幡若宮撰歌合

建仁三年七月十六日

題

初秋花

野徑月

左白亭

海邊馬

霧中菊

山家松

作者

女房

攝政大夫臣

前大僧正意忠

大納言兼左大臣家院

権中納言兼左大臣家院

権中納言兼左大臣家院

沙弥持河

後成卿女

女房三内卿

大納言兼左大臣家院



左を備檢少將藤系於臣國通 左を備檢少將友系於臣雅純

左を備依源於臣具親 敬信鴨縣臣長明

左を備尉藤系秀徳

一番 初林氏

左 係 女房

右 係 女房

右 係 女房

かゝるもまはれはやあつし社が死にわ林のまゝあ  
た言申さうまきぬ海もんす心海もあう  
仍亦右を社が死にわしつる心海もあう  
かゆふお月も言合の例として一書の手たをが  
一たはう一はよまは付振とま守女中と作し  
終るもあ例亦仍亦右を社が死にわしつる心海もあう



中何と云ふすまゝの物た又いふくたうくえし  
物色いそ<sup>後</sup>秋の物とゆふすとりゆし

二番

九 猪

振政丸太官

なごふに花乃秋乃けいけみまうさうの物ゆめ

右

高田卿

六月やうらひにいぬえもまがふまうさうの物ゆめ  
なごふの秋乃けいけいけいけいけいけいけい  
いみいけいけいけいけいけいけいけいけいけい  
はるふたうけいけいけいけいけいけいけいけい

くしんは物色いたるゆめいけいけい

三番

九

後成卿女

此乃家もゆめはけいけいけいけいけいけいけい

右

給聖徳月

女房

はひま<sup>秋</sup>の物色いたるゆめいけいけいけいけいけい  
なごふの秋乃けいけいけいけいけいけいけい  
なごふの物色いたるゆめいけいけいけいけいけい  
有明の物色いたるゆめいけいけいけいけいけい

四番



丸 猪

後成の女

あつちの月を井の月を<sup>の</sup>あつちの月をむすべし

右

右明

かたははあつちの月をむすべし

たつちの月をむすべし

よふとあつちの月をむすべし

いふとあつちの月をむすべし

あつちの月

丸

丸

猪の

あつちの月をむすべし

右 猪 故郷音

右 音

あつちの月をむすべし

あつちの月をむすべし

あつちの月をむすべし

あつちの月をむすべし

丸

丸 猪

右 家

あつちの月をむすべし

右

秀 能



花もふとちくちくしーたうりあうのまをれ秋の夕まきと  
たあふゆもた色々みろふふとこぼるたけしーんてゆを  
たうたこのとれあふれまおのまをけるやとつとつと  
てゆえにた秋まうのうちしーけまけしてゆん

七ま

た

後成の女

やうまおのりま志林のまをしくよむしーていそまおん

た 猪 湯 魚 席

折 政 大 大 臣

伊雲ふはんさるまきしーのしーひちのうらなれまも

たあおのりまの音いよまじしーとこしーんてゆを

た他ぞかつをまきしーしーひちのうらなれまも  
とまにあしーしーてゆらたやうまきしーつとみまおやけ  
とまきしてまゆんゆたゆとまきしー

八ま

た 拵

あ 糸

かろしーまゆらけしーひちのうらなれまも

た

家 蛇

浦つようしーまゆらけしーひちのうらなれまも  
たかのしーまゆらけしーひちのうらなれまも  
とけはよりまゆらけしーひちのうらなれまも



みくはるは長き御つしようしむらきしつる心え  
じふとやみえはるは常願慈ふらぬとく今や

九

た

種

今をあるはみまふしつよりいほはれおとめ月と思ふ

右

雅

あはれはるはみまふしつよりいほはれおとめ月と思ふ  
たよりはるはみまふしつよりいほはれおとめ月と思ふ  
まあはるはみまふしつよりいほはれおとめ月と思ふ  
あはれはるはみまふしつよりいほはれおとめ月と思ふ

十

た

後

松尾やをいほはるはみまふしつよりいほはれおとめ月と思ふ

右

秀

あはれはるはみまふしつよりいほはれおとめ月と思ふ  
たよりはるはみまふしつよりいほはれおとめ月と思ふ  
まあはるはみまふしつよりいほはれおとめ月と思ふ  
あはれはるはみまふしつよりいほはれおとめ月と思ふ

十一

た

意

あはれはるはみまふしつよりいほはれおとめ月と思ふ



右

右

枕とくはけにちかきしるし  
たうまをたやにふるふらふら  
右うらむとくしるし  
うまをまたしるし  
以たてのふ

十三番

左 荷

右 良

まむしふのつらみとけの神まやふ  
右

右

右

ありふくそとをば  
たうまのつらみとけの神まやふ  
右の南のつらみとけの神まやふ  
ゆんはた結い

十三番

右

右 政

たうまのつらみとけの神まやふ

右 結山家松

右 序

都人ともなふし  
たうま松海にたうま



きてゆくか一人とてくさくさのうらみ  
なとちかきまをくくおしきりな松浦の  
いしにまをいれまはるる

吉野

たお

因通

花うさぎのおもひ松の月くさやじう地のはさひと

ち

具親

ほしをるはなとたぬい旅のまはるるははは

たちあはるるまがふりて縁原をながむ

十のあ

たお

梅の

いほるはなとくさくさの松のまをいれまはるる

ち

ふかしのれをいれまはるるはなとくさくさの松の

ちかきのまをいれまはるるはなとくさくさの松の

あまのまをいれまはるるはなとくさくさの松の

くさくさの松のまをいれまはるるはなとくさくさの

あまのまをいれまはるるはなとくさくさの松の

あまのまをいれまはるるはなとくさくさの



1500



